

ASIS&T 年次大会2016参加及び デンマーク図書館見学記

免許資格課程センター助教の佐藤翔と司書課程受講生の小田瞳穂、中幡祥子、坂本恵美子は、2016年10月14日から18日にかけてデンマーク・コペンハーゲン市で開催された Association for Information Science and Technology (ASIS&T) に参加し、2015年度の図書館演習で行ったグループワークの成果についてポスター発表を行った。

ASIS&T 2016 annual meeting ウェブサイト

<https://www.asist.org/events/annual-meeting/annual-meeting-2016/>

佐藤らの発表予稿

Nakahata, S., Sakamoto, E., Oda, A., Kobata, N. and Sato, S. (2016), Effects of color of book cover and typeface of title and author name on gaze duration and choice behavior for books: Evidence from an eye-tracking experiment. Proc. Assoc. Info. Sci. Tech., 53: 1-4. doi:10.1002/pr2.2016.14505301100

<https://dx.doi.org/10.1002/pr2.2016.1450530110>

会議期間中はポスター発表・口頭発表セッションの聴講のほか、コペンハーゲン市内の著名な図書館を訪問・見学した。以下に掲載するのは参加学生の ASIS&T 参加と図書館見学に関する体験記である。

ASTS&T 参加・デンマーク図書館見学記

心理学部心理学科 小 田 瞳 穂
中 幡 祥 子
坂 本 恵 美 子

1. はじめに

私たちは10月中旬にデンマークのコペンハーゲンで開催された国際学会 ASIS&T 2016に、免許資格センターの佐藤翔先生とともに参加し、ポスター発表を行った。参加した学会での経験や、コペンハーゲンで見学した2つの図書館について紹介する。

2. ASIS&T への参加

ポスター発表の時間までの間、複数の講演を聴講させていただいた。正直に言えば、免許課程として3年間学んだとはいえ専門外の分野での英語による講演は、理解できたとは言い難い。むしろ、多くがよくわからなかった。それでも、今まで大学で学んだことを、より掘り下げて行われた調査・研究の最新の見解に触れることは、とても興味深かった。特に、印象に残っているのは、ホームレス支援に対する図書館員へのインタビュー調査である。単に情報を提供するだけでなく、情報への道筋をサポートすること、また日中のシェルターとしての図書館の役割への関心など、公共図書館ならではのあり方を意識している図書館員の存在がある一方で、

そうしたサポートを実践している図書館が多くはない問題も明らかにされていた。実際に図書館で働く人を対象に調査を行い、分析し、新たな問題を浮き彫りにさせるという研究を知ること、今後図書館はどのような道を進むべきかを考えるきっかけになった。

その後始まったポスター発表では、昨年度の図書館演習の授業の一環で行った研究についての発表を行った。本が並んだ書架から本を選択する際に、背表紙の色やフォントがどのような影響を与えるのかについての研究だ。ポスターの前に立って、先生を中心に質問に回答したり、指摘や意見を頂いたりした。質問内容は、研究の目的や使用した装置、研究の参加者などについての質問や指摘が中心だった。中には、学校図書館での司書の経験があるという方からの「子どもは青色の本が好きなので、子どもを対象にすれば青色の本がよく選択されるのでは」というご意見もあり、今後の研究において非常に参考になるだろうと感じた。質疑は当然ながら英語で行われたため、なかなか言いたいことを伝えられなかったり相手が言っていることが分からなかったりすることもあった。しかし私たちのつたない英語にも耳を傾け、研究について貴重なご意見をくださった方々にはとても感謝している。

3. コペンハーゲン図書館見学

コペンハーゲン市内の二つの図書館を巡った。最初に行ったのはブラックダイヤモンドと称される王立図書館だ。外観は美しく、図書館とは思えない建物だと感じた。中に入ってまず目についたのはアート展示だ。日本ではあまり展示されないようなエロスなアートも展示しており、日本よりも図書館が開放的でどのようなものでも受け入れるという姿勢を感じた。次に旧館を見学した。1900年頃建てられたというその建物は歴史を感じる厳かな雰囲気であり、そこにある本たちはどれも貴重そうなものばかりであった。レファレンスブックが大半であったが、あまり本がわかりやすく並べられているようには感じず、実際利用者が自分で本を探している様子もなく、必要な本を司書が探し持ってくる国立国会図書館のシステムと同じようなものなのかと感じた。新館は日本の図書館と大きな違いは感じられなかったが、利用者が使う座席に本がキープされており、利用者がそれぞれの席を借りているシステムは日本ではあまり見たことがないので面白いものと思った。

次に行ったのが王立図書館から徒歩20分程度で行けるコペンハーゲン市立中央図書館である。外観はまるでただのビルのようにあり、中に入ると一階には新刊やおすすめ本が台に平積みされていたり、予約本が棚に面陳されていたり、その明るい雰囲気と隣接されているカフェが合わさってまるで本屋のようだと感じた。二階が上がって驚いたのは、多くの本の表紙カバーが取られカラフルなカバーに替えられていたことである。本棚には青やピンク、黄色などカラフルな背表紙が並んでいた。まるで私たちの今回の研究内容と関係しているようでとても興味深かったが、カバーが外されていない本もありどのようなルールでカバーを付け替えているかがわからなかった。他の階を見学していくと、子ども向けの本のゾーンでは山ほどのおもちゃが置いてあったり、ゲームの貸し出しをしていたり、音楽の本の近くには楽譜や電子ピアノなどの楽器が設置されその場で練習できるようになっていたり、日本の図書館とはまるで違う様子にただただ圧倒された。図書館が市民の憩いの場であり、身近に過ごす場所となっている作りだと感じた。もう一つ気になったのが司書を見かけないことである。本の貸し出しや返却は利用者がセルフで行っており、司書は決まった階に待機しているようであった。利便性や本の管理状況がどうなっているのかはわからないが、司書の業務内容は軽くなっているのだろうと思った。

どちらの図書館も日本の図書館とは雰囲気が全く違い、この2つの図書館を見学できたことはとても勉強になった。他国の図書館を見学することで、日本の図書館の良いところ、改善すべきところとは何か、と考えることができた。

4. おわりに

初めての学会に参加して、世界の研究者はどのように自分の研究を発信しているのかと感じた。まだまだ私たちには理解しきれない研究も多かったが、非常に勉強になった、また、自分たちが行った研究に対してたくさんの方から意見をいただけたことはとてもいい経験になった。また、日本とは全く違うコペンハーゲンの図書館を見学したことで、日本の図書館について深く考えることができた。

このような貴重な機会をいただいたことに、とても感謝している。